

熊本市内小学校教師の体育授業における指導上の困難さについて

大石 康晴*

Difficulties of teaching physical education class on elementary school teachers in Kumamoto city

Yasuharu Oishi

(Received September 30, 2020)

Basically, elementary school teachers in Japan have to teach all of the curriculums, including a subject “physical education”. It is expected that some teachers would be feeling the difficulties on teaching physical education class because of the lack or poor of their experiments of teaching physical education class or performing sport itself. This study aims to clarify the difficulties of elementary school teachers in Kumamoto city on teaching physical education class. A total of 144 teachers cooperate this study. The gymnastics and swimming are the top two subjects that many teachers are feeling the difficulties on teaching, and those are hoping additional teaching supporter, advices on teaching methods, and to have sufficient tools. They also feeling the lack of time of preparing/tidying up and of school hours of class. Most teachers are studying the teaching methods of physical education by the advice from professional or experienced teachers, internet, and technical books, but not sufficient in fact. To resolve difficulties of teaching physical education, the elementary school teachers in Kumamoto city are hoping the support or introduction of additional teaching staff, a specialized teacher for physical education, and the chance of workshop.

Key words : the government curriculum guidelines, elementary school, physical education, specialized teacher

* 熊本大学大学院教育学研究科

1. 緒言

小学校学習指導要領（平成 29 年告示）では、「生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成すること」を体育の目標とし、「健康・安全についての理解」、「基本的な動きや技能を身につけること」、「体力の向上」を育成目標に掲げている¹⁾。小学校高学年（5・6年生）の体育では、「体づくり運動」、「器械運動」、「陸上運動」、「水泳運動」、「ボール運動」、「表現運動」の6領域が指導内容として掲げられている。基本的に、小学校教員はすべての教科を担当が主として教育しており、体育授業も例外ではない。本学教育学部では、体育に関する授業は必要最低限のものしか開講されていないのが現状であり、体育を指導する知識や経験、技能が十分でない多くの卒業生が、教育現場の体育授業の指導において様々な困難や悩みを抱えていることが予想される。

そこで本研究では、小学校教員が体育の指導でどのような困難や悩みを感じ、どのように対応しているかの現状を明らかにし、その解決の糸口を探ることを目的として、熊本市内小学校教員にアンケート調査を実施した。

2. 方法

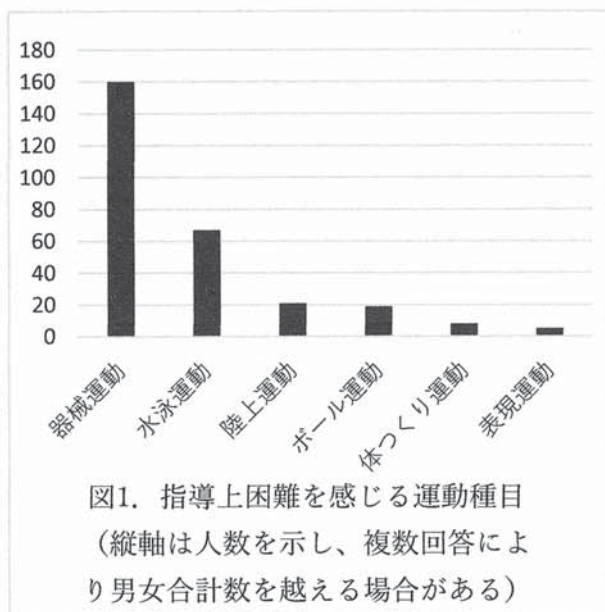
- 1) 熊本市内8小学校の教員を対象に質問紙法により調査を行った。対象教員の男女・年代別の人数は表1に示した。合計人数144名の内、50代の教員の人数が最も多く(41.0%)、次いで40代(27.8%)、20代(14.6%)、30代(13.2%)の順であり、男性教員は55名(38.2%)、女性教員は89名(61.8%)であった。
- 2) アンケート調査の主な内容としては、①どのような運動種目に指導上の困難を感じるか、②その具体的な内容はどのようなものか、③指導する際の工夫およびサポート体制(希望を含む)について、となっており、記述式によりできるだけ具体的な内容や思いを記入してもらうようにした。

表1. 調査対象教員の男女年代別の人数構成

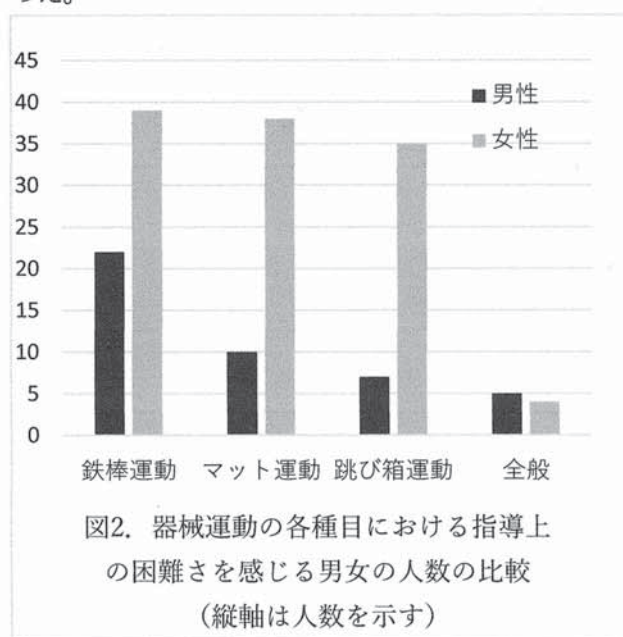
	20代	30代	40代	50代	60代	無記入	合計
男性	10	10	16	17	2	0	55
女性	11	9	24	42	2	1	89
合計	21	19	40	59	4	1	144

3. 結果

- 1) 指導上困難を感じる運動種目：図1には、指導上困難を感じる運動種目について男女合わせた総数(重複回答を含む)を示した。6種類の運動の内、器械運動の指導に困難を感じる人数が最も多く、以下、水泳、陸上、ボールの各運動であった。

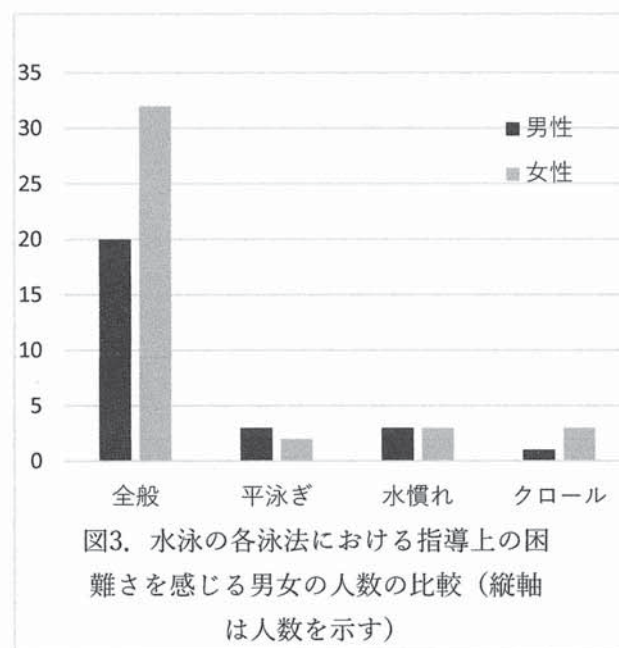


上位2種目の運動の内、器械運動(図2に示す)では、40%以上の女性教員(35~39人)が鉄棒、マット、跳び箱のどの種目についても同じように指導の困難さを感じており、一方、男性教員では鉄棒の指導が困難だと感じる割合(22人、40%)が最も高い結果となった。



また、水泳運動(図3に示す)では、男性教員(20人、36.4%)、女性教員(32人、36.0%)ともに水泳全

般の指導に困難さを感じていることが明らかとなった。



2) 指導上の困難さの具体的な内容: 得られたアンケート内容を分類すると「人的側面(教師サイド)からの困難さ」、「人的側面(児童サイド)からの困難さ」、「時間的側面からの困難さ」、「物的側面からの困難さ」、「安全面からの困難さ」、「その他(自由意見)」に分けることが出来た。

① 人的側面(教師サイド)(表2)では、教師自身の経験や知識・ルール理解不足などによる指導力の不足に対する意見が多くみられた一方で、児童全員を指導するための補助者を含む指導者の人数不足を訴える声も多くみられた。人的側面(児童サイド)(表2)

表2. 困難さの具体的内容（人的側面）

人的側面 (教師サ イド)	知識やルールの理解不足
	指導する技術・技能の不足
	手本を示すことが出来ない
	指導上のポイントが分からない
	経験がない、自分自身が出来ない
	年齢的に体を動かすことが辛い
	補助がうまくできない
	うまくできない児童の指導ができない
	適切な助言ができない
	水泳の呼吸法が難しい
	指導する教員・補助者の数が足りない
	人数不足で一人で全員の指導が困難
	一人では他のグループの指導ができない
	(男性教員) 女子児童の指導がしにくい
人的側面 (児童サ イド)	運動能力や運動経験の個人差が大きい
	体力や筋力に大きなばらつきがある
	体格差や理解力に差が大きい
	基本的な生活習慣が身につけていない
	体調管理ができない
	特に水泳では個人差が大きい
	マットや鉄棒が出来ない児童が多い
	基礎的体力がとても低い
	恐怖心や不安感が強い
体の使い方やバランスが悪い	
顔を水に付けられない	

では、体格や体力・筋力などの個人差の開きや、運動経験の有無、体の使い方の器用さ・不器用さの個人差が大きいといった意見が多くみられた。

②時間的側面（表3）では、指導のための時間や、準備等にかかる時間、教材研究の時間などの不足を指摘する意見が非常に多かった。また、授業間の休み時間や昼休み時間に準備・片づけを行うと休憩時間が無い

表3. 困難さの具体的内容（時間・安全・物的側面）

時間的 側面	準備や片付けの時間確保が困難	
	場の設定時間がない	
	着替えやトイレの時間が短い	
	10分間の休み時間だけでは足りない	
	指導時間数が不足している	
	運動量を確保する時間が足りない	
	十分な練習時間が不足している	
	児童が達成感を味わうまでの時間が不足	
	急なハプニングに対する時間の不足	
	休憩時間が取れない	
	教材研究のための時間が足りない	
	安全面	怪我をしやすい児童が多い
		教師一人では全ての児童に目が届かない
安全面から複数の指導者や補助者が必要		
安全面での配慮が必要（十分ではない）		
補助者が欲しいが、いない		
熱中しすぎて怪我をすることがある		
怪我の心配で難しい技をさせられない		
種目によって危険で怪我をしやすい		
水泳の授業の安全確保が難しい		
物的 側面	器械運動は怪我をしやすい	
	体育館や運動場が十分に使えない	
	用具や器具が不足している	
	用具が古い、破損している	
	運動場が狭くスペースを確保できない	
準備物の保管場所がない		

という声も聞かれた。安全面（表3）では、怪我をしやすい児童が多いといった意見や、怪我をしやすい種目があること、また、怪我を恐れる児童が多いことや怪我をさせないために教師自身が消極的な授業になるなどの意見がみられ、一人の指導では目が届かず、限界があるとの意見が多く寄せられた。さらに、物的側面（表3）からは、体育館や運動場のスペースの不足、用具などの数量不足・劣化が指摘されている。

3) 指導をする際の工夫とサポートについて：①授業内での工夫(表4)では、インターネットやタブレットなどICTやVTR動画などを活用した授業を進めるといった意見が多数寄せられていた。また、スキル上達のための場の工夫や危険防止、恐怖心を取り除く工夫、他の教師との連携など、様々な工夫が報告されている。②授業外での工夫(表4)では、インターネット等の活用や専門書での勉強、同僚への相談や研修会等で理解を深めるとの意見がみられた。

表4. 指導上の工夫

授業内の 取り組み	ICT/VTRの活用
	インターネットの活用
	視覚教材の使用
	声かけや模範演技
	いろいろな場の工夫
	スキル上達の場を複数作る
	数値目標を設定する
	スモールステップ
	恐怖心を取り除く工夫
	危険防止のための全体指導
	安全のためのルールづくりと徹底
	児童間での教え合い・アドバイス
	他の教師との連携・協力
	バディ・ペア・グループ・チーム活動
	学習カードの工夫
	様々な小道具・補助道具を使った実践
	習熟度にあわせた指導
授業外の 取り組み	動画を視聴する
	指導書や専門書で勉強する
	インターネットを活用する
	教師間での情報交換
	体育教師や得意な教師に教えてもらう
	先輩からのアドバイス
	研修会や学習会で学ぶ

これまでに受けたサポート(表5)として、同僚教員や補助者・外部講師からの授業サポート、研修会等によるサポートなどが報告されている。また、今後希望するサポート(表5)としては、補助者を含む複数教員による授業担当者、体育専科教員の導入など人的サポート、また施設・設備や用具等の充実といった物的サポート、研修機会の増加などが挙げられた。

表5. サポート体制について

これまで に受けた サポート	同僚や体育教師からのアドバイス
	支援員による補助指導
	合同体育による協力
	研究授業を参考にする
	実技研修会に参加
	外部講師のサポート
今後希望 するサ ポート	校内研修によるサポート
	体育専科教員体制
	複数での指導体制
	補助指導者
	安全のための見守り指導
	専門的な指導者
	プロの指導者や学部指導者の活用
	行政による環境の整備
	予算の確保
	備品や施設の整備・改善
	用具や教材の充実
	指導法の共有や指導書の充実
	マンパワーの拡充
教師自身の研鑽・研修の充実	
指導計画や時間割の工夫	

4. 考 察

今回の熊本市内の小学校教員を対象とした調査では、困難さを感じる運動種目として器械運動と水泳が

圧倒的に高い割合を示し、その具体的な内容としては、器械運動では女性教員は鉄棒、マット、跳び箱など器械運動全般に、男性教員では特に鉄棒に困難さを感じている現状がみられた(図2)。水泳に関しては男女ともに水泳全般の指導が難しく感じていた(図3)。器械運動は教師自身の経験がない場合や自身が出来ない場合には、各種目の指導のポイントや動きや技の「コツ」を伝えることが難しいことは容易に察せられる。また、限られた授業時間数で一人の教師が多くの児童を指導する困難さを挙げる教師も数多くみられ、これは教師個人では解決できない大きな課題である。他方、子どもサイドの問題として、基礎的な体力や運動経験の個人差が大きいこと、恐怖心や体の使い方やバランスが悪いといった意見は、子どもたちが日頃から体を動かす機会が少なくなり、その一方で体力や運動能力の二極化が影響していると思われる。水泳については、男女教員共に水泳全般に困難さを感じている結果となり、我々が以前行った研究²⁾においても、水に対する恐怖感をどのように克服させるかという根本的な課題から、呼吸法や各種の泳法の指導に自信がない教師の現状を報告している。男女間の差について宮尾と三木³⁾は、男性に比べ女性教師の方が運動に対する愛好度や研修参加度が低く、体育授業への苦手度が強い傾向がみられたとしている。また、特に体育が専門で

はない小学校教員が抱える問題として、加登本ら⁴⁾は技術的には「模範が示せない」、「指導技術が不足している」、「技能向上の指導ができない」などの課題、個別指導では「一人ひとりの学びの把握ができない」、「運動のつまずきが診断できない」、「配慮を要する子どものニーズに対応できない」などの課題があることを報告している。

本研究結果では、さらに準備や片付けの時間、授業時間数の不足を指摘する意見や、一人指導による安全面の確保が困難なこと、用具類の不備・不足を指摘する声も多く、これらは学校全体の問題として改善を要する課題と思われる。指導上の工夫およびサポート体制については、授業内・外で教師自身が様々な工夫や努力をしていることが分かる。特に、タブレットやインターネットを用いたICTの活用は熊本市の教育振興基本計画(令和2~5年度)にも示されており⁵⁾、体育の授業でも視覚に訴える指導方法は今後ますます重要度が増してくると思われる。しかし、指導技術や技のポイント、あるいは技術的な「コツ」を知るには体育を専門とする、あるいは指導に熟練した教師に相談することで大きな効果が得られ、今回の調査でも同僚や体育教師からアドバイスをもらうとの回答が多く寄せられた。小学校教師が体育の授業の問題解決方法について調査した加登本らの報告⁶⁾においても、「校

内の同僚の先生に相談する」教師の割合が最も高く(70.7%)、次に「専門書や雑誌で勉強する」(49.5%)、「インターネットによる勉強」(46.9%)の順であった。このことから、学校内における体育教師あるいは体育主任経験者や運動・スポーツ経験者、熟練した教師の存在が重要な位置づけを持っており、学校全体で教師一人ひとりの指導力の向上に寄与するとともに、指導者・補助者の人数を増やすこと、あるいは複数での指導体制の確立、体育専科の導入など、改善の必要な多くの課題が浮き彫りとなった。

令和2年8月、文部科学省は、中教審答申案の作成に向けた中間まとめ骨子案を示し、小学校高学年の教科担任制については令和4年度をめどに本格導入する意向を示し、対象教科に外国語・理科・算数をあげている⁷⁾。このような流れの中、将来的には体育専科教員の導入や複数指導体制の導入が望まれる。

5. 謝 辞

本研究を実施するにあたり、アンケート調査にご協力いただいた下記の熊本市立小学校の関係者の皆様に心より御礼申し上げます：泉ヶ丘小、健軍小、壺川小、詫麻小、龍田小、龍田西小、月出小、西原小。また、本論文の作成にあたり、データ収集や資料の作成等の労をとってくれた研究室の古閑陽丞君に感謝い

たします。

6. 参考文献

- 1) 文部科学省 (2018) 小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 東洋館出版社
- 2) 大石康晴、緒方 裕 (2019) 熊本市立 TN 小学校の水泳授業に対する支援や助言に関する実践報告 熊本大学教育実践研究 36: 139-143
- 3) 宮尾夏姫、三木ひろみ (2015) 小学校教師の体育授業実践に対する支援の検討—実践状況と指導上の困難さに着目して— びわこ成蹊スポーツ大学研究 紀要 12: 37-47
- 4) 加登本 仁、松田 泰定、木原 成一郎、岩田 昌太郎、徳永 隆治、林 俊雄、村井 潤、嘉数 健悟 (2010) 体育授業の悩み事に関する調査研究(その 1) : 教職経験に伴う悩み事の差異を中心として 学校教育実践学研究 16: 85-93
- 5) 熊本市教育振興基本計画 (令和 2~5 年度) (2020) 熊本市教育委員会
https://www.city.kumamoto.jp/hpkiji/pub/detail.aspx?c_id=5&type=top&id=12476
- 6) 加登本 仁、松田 泰定、木原 成一郎、岩田 昌太郎、徳永 隆治、林 俊雄、村井 潤、嘉数 健悟 (2011) 体育授業の悩み事に関する調査研究(その 2) : 悩み事

の解決方法を中心として 学校教育実践学研究 17:

169-174

7) 文部科学省 (2020) 中教審答申案の作成に向け

た骨子 (案) 第 12 回特別部会

<https://www.mext.go.jp/content/20200820->

[mxt_syoto02-000009404_4-1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200820-mxt_syoto02-000009404_4-1.pdf)